

黒木西

黒木西小
学校だより

文責:校長 齋藤英義
令和4年3月11日(金)

NO.23



東日本大震災を忘れない

十一年前、2011年3月11日(金)、東日本大震災が発生しました。

当時、私は黒木小学校で六年生担任をしていました。その日、六年生を送る会が行われ、すごく感動して波のことが流れていました。しばらくテレビの前を動くことができず、慌てて下校指導にもどったことを、昨日のこのように思い出します。そして、週明けに、左のような学級通信を出しました。



先週末(11日)に発生しました東日本大震災におきましては、刻々と明らかになる惨状に、日本国民の一人として胸を痛める日々が続いております。

今回の震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、まだ救助されていない方々の一刻も早い救出、そして、一日でも早く復興活動が展開されることを願うばかりです。

そんな中、卒業式まで、あと最終週を残すだけとなりました。

このような時に、しっかりと卒業式を迎えられることへのありがたさを胸に刻み、一つ一つを大切にしていきたいとの思いから、今回は、今だからこそ大切にしたい想いをつづった詩を、紹介させていただきます。

もし今日という日が、
最後だとわかっていたら
今日の一日を
もっと懸命に生きてたろう。
この目に映るもの全てを、
焼き付けようとしたら。
この手に触れるもの全てを、
愛しく感じただろう。



R3六送会

もし今日という日が、
最後だとわかっていたら、
今日の一日をもっと大切にしたら。
この耳に入る言葉全てを、
脳裏に焼き付けるように
身を傾けたら。
この口から出る言葉全てを、
愛のあるものにしたら。

もし今日という日が
最後だとわかっていたら、
好きな人に好きと伝えて、
大切な人に大切だと伝えて、
感謝の言葉を惜しまなかったら。
今までありがとう、と声をかけて、
抱きしめることだろう。

今日という日が最後だと、
この身体を持つのが最後だと、
この巡り合わせになるのが最後だと、
そうわかっていたらなら、
心無い言葉を吐かず、
愛の無い行動を取らず、
どんな些細なことでも
慈しんで行動しただろう。

今日という日は最後。
明日は来るかもしれないし、
来ないかもしれない。

たとえ、どれほど意外な
幕切れだとしても、
どの瞬間を切り取っても、
どこで打ちきられても、
胸を張ってカーテンコールができる、
そんな舞台でありたい。

先日、「六年生を送る会」を行っていただきました。

胸を張ってカーテンコールができる、そんな卒業式になるといいなと思っております。

あれから十一年。十一年前の学級通信をもとに毎年この想いを忘れてはならない、伝えていかなければならないと考えております。

本校でも、先日2日(水)、ハイブリッド方式(対面+リモート)での「六年生を送る会」を行いました。コロナ禍で、十分な行事等が行われず一年となってしまうましたが、まだ開催できただけでも感謝しなければならず、思いを新たに送る会を見届けました。

六年生は、卒業を日まじしに感じ始め、在校生は、一つ学年が上がることに、喜びと希望をいだきつつ毎日を過ごしています。

本年度も終わりに近づいていますが、

『今日という日は最後』という意識をもって、日々過ごしてほしいと願っています。そして、私自身もその思いをしっかりと心に刻んで過ごしていきたいと思っております。時が経ち、立場は変わっても忘れてはならない想いであると考えています。



R3六送会



R3六送会